

二

一

〇

揮啓仕於此頃の徳意は、（後三） 返り旌

し、（續して） 我々の湖海子の徳は、（新） 徳は、（の） 只減奉く

子、（切） 我々の其主人、（げん） 浮世業手が、（けし） 今日

一人の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、

と、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、

子、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、

氣、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、

我、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、

功、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、

悪、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、

相、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、

我、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、

凌、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、

り、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、

し、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、（お） 我々の上、



悪時わるの常つねに即ち民衆の紙上と諸君の掲載
 相與あひあひ致せし文學者首領を題せし中のあり又
 若くは少生男言之考う若くは百官中百官行
 凌しのぎをあめり致し其後世のあつたやきか餘
 リ残念や即ち即ち同日費けい行の餘白を採借取
 しふえ存ぞんに即ち存ぞんにたじやれ又今更なる民
 衆のあつたやきか餘よは足る若くは何
こまく詰つめる由之男をこまく若くは無遠慮即ち喜却日に
 之若くは詰つめして何ともし思ひやきか餘よは
 此の方あまう酒がくめり若くは是人の例の道

飲食少くは筆のあつたやきか餘よは
 又君常の如くまたとらふは新書の若くは田中
 か得言の筆法を以て酒後のあつたやきか餘よは
あ新呼ぶ声うありし諸君其是のあつたやきか餘よは
あ下し思ふやあ氣が晴々とするは鉄よと厚みの
あきを立たてんあひ日あに即ち即ち海あはつたやきか餘よは
あまありて我あのあつたやきか餘よはあるは型あみ若くは
あああの即ちあつたやきか餘よは笑あすりて蛇足と書法中
あああのあつたやきか餘よは西遊字か千載あけぬあ腹
あ之若くは存ある物あくは此あ七あふあ一あ興あかあ其

西遊字か千載

此等如の多人... 此七亦一真也其

凡

終に... 唯心子造の天地を... 八月廿二日

忠軒居士足下

梅民道人

此園東石塔... 石塔

下... 中在梅文



Vertical text on the far left edge of the page.



河内... 中夜書

昔の心をよめよふはこふはきこふは
 神心よめよふはこふはきこふは
 昔の心をよめよふはこふはきこふは
 を同じくすはこふはきこふは
 一糸の末に於てはこふはきこふは
 勤むるはこふはきこふは
 後よりよめよふはこふはきこふは
 昔の心をよめよふはこふはきこふは
 自らよめよふはこふはきこふは
 昔の心をよめよふはこふはきこふは
 昔の心をよめよふはこふはきこふは
 昔の心をよめよふはこふはきこふは
 昔の心をよめよふはこふはきこふは
 昔の心をよめよふはこふはきこふは

昔の心をよめよふはこふはきこふは

昔の心をよめよふはこふはきこふは

富士山

昨夜... 昔の心をよめよふはこふはきこふは

昨夜強風三時過ぎ
窓紙は捲き去る風を
家の中は冷たい風
音も響くも心は社の
静けさの中 其趣き
高きより中道に
石の如きあり 去らば
直に歩む由なき事
政事 中道に
告げし 一石の如き
日多し 静かき心
於ては 静かき心
之人 静かき心
行はば 静かき心
事なる 静かき心
れし 静かき心
同は 静かき心
一七 静かき心
静かき心 現今
別然 静かき心

一七七
七七
七七

吾多其云 現今の事

別然 毎朝の事

唯云云 中々の事

其の又云云の事

よ夫夫未だ 宛脈

思ふ所在 夫の事

少者努力 今夜

同改之方 而即

さしたる事 為

中道に及 走

守り六二 此

其の事 其

子 其

介

其の事

其の事

中西梅花十景

森田思軒
三軒

本問文庫

文庫 14

C111

